２年Ｅ～Ｈ組現代文（浅田）

夏目漱石「こころ」について

これから２学期の終わりまで、漱石の「こころ」を扱っていきます。
扱い方としては、大雑把に次の予定を考えています。

＜全１２回＞

①初めの４回
オリエンテーションと教科書所収以前の部分、および教科書 135 ページまでの内容

②途中の４回（テスト返し含む）
内容を一度中断し、６つのグループに分かれて割り当てられた課題に関し調査・検討し、発表する。言語面・文化面に重きを置く。

③終わりの４回
教科書 136 ページ以降の内容および全体のまとめ

＜②で扱う内容＞

1班：出版文化史の中での「こころ」
「出版される」という面に関連して、人々がどのような形でこの作品を享受してきたかを、実際の例を示しながらまとめる。

2班：訓読みの特徴
この時代の漢字には、今とはかなり違った読みが当てられている。これを、「こころ」全編を対象に、できれば他の作家の作品とも比較して、その特徴を考える。

3班：外来語の表記
明治期において、外来語や外国人の名前には、漢字を当てはめる努力がなされていた。「こころ」においてはそれがどうなっていて、現代にどの程度継承されているかを、実際に明治期に書かれたものも含めながら調べてみる。

4班：仮名遣いの特徴
単に「歴史的仮名遣い」で書かれていた、ということではなく、その仮名遣いには古文とも戦後の現代文とも異なる揺れがある。その実態を考えてみる。

5班：語彙使用の現代との相違
語句には、国語辞典には載っていても、今ではあまり使われていない意味用法が存在する。それをできるだけピックアップし、どのような意味で使われているか考察する。

6班：「坊っちゃん」と「こころ」の文体の違い
同じ漱石でも作品によって文体が異なる。今回はわかりやすい例として、彼の初期作品である「坊っちゃん」と比較し、どのような違いが文体の差異を作っているかを具体的にとらえてみたい。

こゝろ

上　先生と私

漱石

一

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此處でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々々しい頭文字抔はとても使ふ氣にならない。

旧字体（正字）

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生で

あつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非來いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛る事にした。私は金の工面に二三日を費した。所が私が鎌倉に着いて三日と經たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと斷つてあつた。けれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから國元にゐる親達に進まない結婚を强ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝腎の當人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。

彼は電報を私に見せて何うしようと相談をした。私には何うして可いか分らなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで彼はとう〳〵歸る事になつた。折角來た私は一人取り殘された。

東京学芸大学附属図書館